

体育学における人間学的足跡の素描

阿部 悟郎

- 〈目次〉
1. 序論
 - 1.1. 緒言
 - 1.2. 研究の目的・手順
 2. 本論
 - 2.1. 体育学における人間学的な営為の概観
 - 2.2. 体育学における人間学的蓄積の様相とその概観
 - 2.3. 体育学における人間学的認識の略図素案
 3. 結語
 4. 註および引用・参考文献
 5. 分析対象文献

1. 序 論

1.1. 緒 言

体育学を歴史的に遡れば、おそらく古くは西欧古典にみる身体教育論議に辿り着くことであろう。それをより厳密な学的形式において捉え直すならば、それでもやはり西欧啓蒙主義思想の時代にまで遡らなくてはならない⁽¹⁾。ところが、その専門科学としての学的独立は、西欧、とりわけドイツにおいては20世紀前半⁽²⁾、そして米国においては20世紀中頃まで待たなくてはならない。学問の永い歴史と伝統からするならば、岸野が述べるように、体育学はなるほど自戒を込めつつニューであり、そしてヤングなのである⁽⁴⁾。このような意味において、体育学はまさに学的発展と確立の途上にあり、そこには数多くの学的課題が山積しているのである。

ところで、体育学には、数多くの学的課題があるが、とりわけ本質的なものの一つとして、人間学的な課題がある。体育学におけるこの人間学的な課題は、いわゆる人間理解の問いに代表される。おそらく、人間理解の問いは体育の本質論議と密接に繋がってくる⁽⁵⁾。体育の概念を完全に有効たらしめる為には、必然的に人間の真なる本質の正しい把握に依らざるを得ないのである⁽⁶⁾。そして、そのような人間理解の問いを究明する人間学的な営為は、体育研究に道を示したり、体育実践に目標を提示したりするのみならず、体育学的な思考に解明力と判断基準を与えてくれることであろう⁽⁷⁾。体育学にとって、このような人間学的な課題は極めて重要なのである。そして、それはやがて体育学の発展とその確立に繋がっていく。

それでは、体育学において人間学的な課題は、どのように探究されてきたのであろうか。体育学がそれまで歩んできた道程が、なるほど学問の歴史と伝統からして比較的短いものであるとしても、そこには相応の人間学的な蓄積があるはずである。前述の如く、体育学において人間学的な課題が本質

的であり、そして重要であるならば、おそらくそこには有意義な人間学的論議の数々が認められるのではないだろうか。そこで、体育学における人間学的蓄積の如何が問題として立ち現れてくる。体育学における人間学的な課題の探究も、暗中から唐突に飛び出すものではなく、まさに先人が生み育ててきた叡知の上に徐々に積み上げていくものである。従って、体育学は人間学的な課題を周到に押し進めていく為に、それまでの人間学的な足跡を正しく把握しなくてはならない。

1.2. 研究の目的・手順

体育学における如何なる学的営為も、先人がつくりあげてきた学的財産の上にある。このような意味において、体育学は、まずそれまでの学的蓄積を正しく対象化し、それを周到に批判しなくてはならない。それゆえに、体育学において人間の存在やその本質を問い、それを学的形式において追求しようとする人間学的な営為は、その究め進む道をより確かなものにする為にも、それまでの人間学的蓄積の全体像を正しく把握しなくてはならない。

一般に、ある学的蓄積を正しく把握しようとするためには、まずそこに認められる既存の学術団体の学的営為の数々を隈無く対象化しなくてはならない。日本における体育学に関する学術団体は、所謂、日本体育学会であり、それは1950年に設立されている⁽⁸⁾。その日本体育学会の学的活動は、逐年で開催される学会大会の研究発表とその抄録集、そして学術刊行物によって公表される。この日本体育学会を中心としながら数多くの関連学術団体が設立され、それらが力動的な関連を保ちながら、体育学の研究が遂行されていると言えよう。それに大学・研究所等の紀要・研究集録集等の刊行物を加えることによって、日本の体育学研究の総体が構成されることであろう。本来、ことを厳密に進めていくならば、そこまでを分析対象にしなくてはならない。ただ、一先ずここでは、日本の体育学研究の基幹ともいえる日本体育学会に焦点を当てて検討を進めていきたい。これによって、本稿の分析・検討は、日本体育学会の責任のもとに公表された出版物等が中心となるべきである

が、ここではその端緒として、学会大会研究発表とその抄録集に資料価値を認め、それらを中心に検討を進めていくこととしたい。

ところで、体育学における人間学的な課題は、前述の如く、人間理解の問いの形式に代表されることであろう。そして、このような問いは、主題的に問題設定されることもあるが、多様な形式をとりながら潜在化していくこともある。それゆえに、体育学における人間学的な蓄積をより正しく把握するためには、主題的な問題設定のもとに押し進められた人間学的営為もさることながら、そこに人間学的な主題を掲げていないとしても、そこに某かの人間学的認識が潜在しているならば、それらをも可能な限り汲み上げていかななくてはならない。体育学における人間学的蓄積の実質についての把握は、それらの総体をもってようやく可能となろう。

これらから、本稿の目的は、体育学の学的発展とその確立の為に、体育学における人間学的営為の学的蓄積を分析し、体育学におけるそれまでの人間学的研究の全体像を素描すると共に、その学理論的様相を検討することとする。そこで、本稿の手順は、日本体育学会学会大会研究発表について第1回大会（1950）から第50回大会（1999）について研究発表抄録を通覧し、そこに窺い得る人間理解の認識形式やそこに照射される人間存在姿勢、そしてそれらに準ずる人間学的な論述を抽出し、それらを分析・検討することによって、日本の体育学における人間学的蓄積の全体像の素描を試みることにしたい。なお、学会大会号が独立刊行されるのは第22回大会（1971）からであり、それ以前のもは「体育学研究」と「体育の科学」に合併掲載されている。ただし、第6回大会の研究抄録は、それらのいずれのものにも確認され得ない。従って、これについては谷村⁹⁾に従ってその主題のみは確認され得るが、その内実が詳細に把握され得ない以上、参考に留め置かざるを得ない。本稿においては、これらを範囲として分析・検討が行われ、ここで選定されて分析対象となった文献の全ては巻末に記すこととする。

さて、体育学において為される人間学的な営為は、その主題が多岐に亘るとしても、最終的には体育学における人間理解に対する学的有効性を有する

筈である。それゆえに体育学において為された数多くの学的営為に潜む人間学的資料を正しく見出し、そして、それらを可能な限り著者の論述に忠実なかたちで抽出したい。それらを総合的に捉え直すことによって、体育学における人間学的営為の学的蓄積の大まかな全体像が浮かび上がってくるのではないだろうか。

2. 本 論

2.1. 体育学における人間学的な営為の概観

体育学の数多くの学的営為において、人間学的な蓄積の実質をより適正に素描するためには、個々の研究に潜む人間学的な諸契機を人間学的資料として抽出し、そこに然るべき学的形式を付与していかななくてはならない。体育学における学的営為は、それが人間を主題的に問うものでないとしても、それらのおよそのものは、どこかで人間そのものへの問いを含んでいる筈である。そうではあっても、それらの全てがそうであるという無思慮な前提で分析を進めていけば、論理解釈に曲解が生じ易くなり、その操作に徒な恣意性が混入し分析が粗雑になる可能性がある。分析操作においては、抽出された論理形式と論者の本意に乖離が生じることは回避しなくてはならない。従って、ここでの分析操作は、論者の自覚的な論述に焦点を当て、そこから人間学的資料の抽出を試みていきたい。但し、そこで抽出された認識形式が、そのまま彼らの人間学的立場である訳でなく、彼らがそこにおいて照射し得た一つの間学認識であるに過ぎないことを失念してはならない。過度な拡大解釈は慎んで控えるべきである。これらを踏まえながら、以下、論者ごとにそこにみる人間学認識を抽出していきたい。⁽¹⁰⁾

まず、木村静雄(1: 1951)の人間学認識はその体育論・心身関係論に見出される。彼は体育の対象としての人間を、心身両生活の統一において捉えながら、それを身体的存在として集約させていく。そして、動物の格として

の肉体を、人間の格としての身体と峻別し、そこに主体的自己決定の実践的・行為的現実を認めていく。人間はそのような身体として存在しているというのである。

安仲卓文（2：1957-1963）の人間学的認識は、その体育論・心身関係論・人間論に見出される。彼によれば人間は、ある一つの本性を有し、それは心とも体ともつかないまさに統一的で全体的存在であるという。その上で、彼は人間の本性を、人間の極限状況において顕現する真の全体的統一的な在り方に探っていく。それは、様々な生存の条件に制約を受けながら、その限界を越えて自らを投企し、そして超越していく実存的な在り方であると言えよう。

石橋武彦（3：1957-1961）の人間学認識理は、その思想分析・心身関係論に見出される。彼は近世・近代の西欧思想、とりわけペスタロッチ、フレーベル、ロックを辿った。そして、フレーベルに従い人間の神へと至る精神を、ペスタロッチに従い人間の本性の内発性を、そしてロックに従い精神の命令に服し、それを遂行するものとしての身体を描き出した。人間の本性は、そのうちより発動しやがては神へと至る精神にこそある。彼は、人間はその存在のうちにある、そのような形而上的な精神的存在性を照射したのである。

佐々木久吉（3：1957-1959）の人間学的認識は、その思想分析に見出される。彼は近代の西欧体育思想、とりわけヘルマン・アルトロックを辿り、人間の生成の論理に着目する。彼は、その思想分析において人間生成を、カオスからコスモスへと至る向上的な道程において描き、そこに、健康等の生物学的な次元、達成等といった社会・文化的次元、生のよろこびといった創造的・実存的な次元を認めていった。人間は、まさに生成的な存在であり、それは各々の生成次元の重層において捉えられる。その全体構造は、まさにコスモスへと到る形而上的な生成と言えよう。

天野美亀雄（1：1957）の人間学的認識は、その思想分析・身体論に見出される。彼は東洋思想、とりわけインド宗教思想のマヌの法典を辿り、小宇宙としての人間に着目する。彼は、人間を宇宙万物の創造主の分身でありつつ

それと同種のものとし、それを靈魂や精神とした。そして、人間の本質を、創造をもたらし、その源泉を秘める精神において描き出していったのである。無論、そこに宗教的な色彩が強いことは否めないが、人間が、精神において創造的であることについての着目点は、然るべく重要視されなくてはならないだろう。

谷岸博（1：1958）の人間学的認識は、その思想分析・心身関係論に見出される。彼は西欧古典、とりわけプラトンを辿り、人間の心身関係とそれらの統合による人間の在り方を探っていた。彼は、所謂、精神と身体の二元論を踏まえつつ、それらの統合によって人間は神へと高まりゆくことに着目する。即ち、彼は、人間存在において相矛盾を孕む二つの存在契機が統合されることによって、人間は、動物の状態から神への状態へと高まりゆくことを描いたのである。これによって、人間の存在は、動物から神へと到る連続線上において捉えられていく。

本村増太（1：1958）の人間学的認識は、その体育論に見出される。彼は人間を社会的存在として捉え、人間らしさ、所謂、人間性を、自然のものとしての生物的契機、文化享受等の文化・社会的契機、自己表現等の創造的・実存的契機によって構造化した。それらの三契機の連関において、人間の社会的存在性は成立するという。

阿部忍（20：1959-1993）の人間学的認識は、その心身関係論・思想分析・文化論・人間形成論・学理論・人間論・身体論・文化論・教育授業論に見出される。彼は、人間を心身の相関統合において捉え、それを行為的表現的存在として描き出した。そのような存在形式は、まさに社会的・歴史的条件と個体的実存的条件が相互に規定しあう全体的な存在様態なのであり、彼は、そこから現実への対決と未来への決意によって主体的に自らを投企し、現存在を超越していく実存的な在り方を導いていった。おそらく彼の人間学的主眼は、如何なる状況下においても、常に真の自己であろうとする実存への意志や動機、生の充実に向けて主体的に自己を投企し、それによってより豊かな自己を創造していこうとする実存的・超越的な存在形式こそにあったので

はないだろうか。

見形道夫（3：1959-1969）の人間学的認識は、その思想分析・人間形成論・体育論に見出される。彼は、人間を身体と精神の同質二面の全体性において捉え、神の創造したものとして善なる方向へと高まりゆくものとして捉える。そして、その本性を肉体的生命としての物体性、社会や歴史的現実における精神的生命としての社会性、実践的主体としての実存性から構造化する。即ち、彼は、それらの三つの存在契機の連関において常に神の導きへと高まりゆく生成的な存在形式を描き出したのである。

草野清子（3：1960-1962）の人間学的認識は、その舞踊理論・思想分析に見出される。彼女は、近現代の舞踊思想、とりわけボーデヤラバンを辿り、人間の生きる実質への切り込み、人間の二重性に着目した。即ち、人間の生は、生物・社会的に生きる現実の相とよりよく生きようとする創造的・理念的な相の二重性においてある。そして、彼女は、それに加うるべき最後の相として、神との関連においてある存在の仕方をあげた。それは、神の創造への畏敬であり、ここにおいて人間はようやく全人的存在となるという。人間存在の全体性の成就是、存在の内的完結にあるのではなく、寧ろそれによって啓かれてくる絶対的世界あるいは絶対者との対峙や関わりにあるのかも知れない。それ故に、人間存在の全体性の論理は、そこから形而上的なコスモロジーへと繋がっていく。

石坂均（1：1960）の人間学的認識は、その思想分析に見出される。彼は、西欧古典、とりわけホメロスを辿り、その理性的な存在性に着目した。それは、まさに人間を単に動物から引き離すばかりでなく、寧ろ人間を神へと近づかしめるものであるという。人間の存在は、動物から神へと到る連続線上において捉えられ、理性は重要な存在契機として、その生成を動因するのである。

石津誠（5：1961-1969）の人間学的認識は、その体育論・人間運動論・思想分析・人間形成論に見出される。彼は、身体的制約事実起因する有限性を背負った行為的な存在性に着目する。そして、人間を物質的肉体、歴史

的・社会的現実としての身体，行為的生命，あるいは健康な生物的な身体，能力ある社会的価値と関わる身体，それらを統合し行為において人格として自らを形成しゆく主体的創造的行為者という契機から構造的に捉えようとした。そして，特に行為的生命あるいは主体的創造的行為者における実存的性質に主眼を置く。即ち，それは，それらの前段階に位置する生物的なものや社会的・文化的なものを人格において統合し，目的的に行動を選び，それに向かって限界状況を乗り越えていく自己超越・実存在的な在り方なのである。

原田碩三（1：1961）の人間学的認識は，その思想分析・心身関係論に見出される。彼は西欧近世の思想，とりわけルソーを辿り，その心身関係論に垣間見る二元論とそれらの主従関係を踏まえつつ，人間の本来的一体性を説く。即ち，本来，心身は一体のものであり，人間の諸反応はすべからず全体的なものであるとする。

近藤英男（10：1961-1993）の人間学的認識は，そのスポーツ論・遊戯論・思想分析・身体論・文化論に見出される。彼は，人間の主体的存在を中心とする実存在的な在り方に着目する。即ち，彼によれば，人間は，未来に向かって主体的に自己決断し，そして自らを投企し，それによって自らの新たなよりよき生を創造していく実存在的な存在である。そして，人間はその妙なる自己創造を通じてマクロコスモスへと高まりゆく。即ち，人間は生物的存在としての次元から人間的な次元を超え，やがて大宇宙的な存在としての浄遠雄大なコスモスへと到る。彼はそこに人間存在のコスモロジーを描いていったのである。

小林信次（2：1962-1966）の人間学的認識は，その舞踊理論に見出される。彼は，人間の生命的要素に着目し，その根源に創造的な原動力をみる。それは，まさによりよく生きようとする実存在的な内発的動因であり，それが生命的・自然的・歴史的條件に制約されながら発現された時，文化が創造されていく。彼は，人間の存在の本質の一端を，その生物的一般性や所与の社会的・文化的連関において躍動する創造的な在り方にみるのである。

篠田基行（10：1963-1992）の人間学的認識は，その思想分析・心身関係

論・体育論・スポーツ論に見出される。彼は、スポーツヒューマニズムの探究において、よりよい生をもとめる人間の実存的要求とより人間的でありたいと願う生の超越的契機にも着目した。例えば、生身の人間が全力を投入してなす全一的努力はやがて生命の高揚をもたらし、そして自己の享受に導かれていく。これによって、あるべき真の自己が探究され、実現されていく。ここに人間としてのより人間的な在り方が見出されていくのである。そして、それを可能とする人間性の基本因子を、大江精志郎の論に立脚して、原始生活力、本能的社会性、創造的理知性として描いた。より人間的な存在は、それらの因子の連関によってつくりあげられていく。

浅田隆夫（2：1965-1986）の人間学的認識は、その体育論・身体論・文化論に見出される。彼は、人間を可塑的な生命体として捉え、それらを生理的・心理的・社会的次元から把握しようとした。そして、その生命体は、そこに内在する創造的主体によって、その自然性と所与の文化性においてスパイラルに人格へとつくりあげられていく。それによって、人間はようやく人格として社会に存在するのである。まさに、人間は人格として社会的存在であり、その存在の根源には創造的主体がある。彼は、人間の存在の根底にある創造的な在り方にこそ、人間存在の本質の一端をみるのである。

下津屋俊夫（8：1958-1971）の人間学的認識は、その学理論・思想分析・身体論・心身関係論に見出される。彼は、人間を実践的主体としての身体的存在とみる。即ち、ここでの身体は、靈魂や精神の具体的な人格現象であり、それは宇宙の靈性へと連なる形而上的な身体である。この意味において、人間は身体的存在として同時に形而上的な存在であり、そこに人間存在のコスモロジーが拓かれていく。そして、それはまた価値を求めて突き進む生命の本質の躍動によってなされ、人間は、生命の源泉への無限の拮がりに対峙していることに導かれていく。まさに人間の価値追求の道程は、それが身体的存在であることを通じて形而上への拮がりを孕んでいるのである。

北田明子（8：1966-1991）の人間学的認識は、その遊戯論・思想分析・現象学理論・身体論に見出される。彼女は、遊戯が実存に根ざしていることに

着目し、とりわけサルトルに従い、人間の現存在と実存の二重性から、絶えず現存在を否定しながら真なる自己を求め超越を続ける存在の在り方に光を当てる。即ち、人間は、このような存在様式において、主体的に自己決定し、自らを投企し、そこにおいて創造的に自己をつくりあげ、本来的な自己を実現していこうとするのである。それこそが、人間の本質に根ざした存在の在り方であるとする。まさに生成の途上にある創造的・超越的・実存的な在り方に、人間の本質の一端をみることができよう。

永井康宏（1：1966）の人間学的認識は、その体育論に見出される。彼は、人間を身体的、心理的、精神的存在として捉え、それが生まれながらにしてあるのではなく、発達や学習を通じて、やがて自由に行為し得る人間へと生成しゆくことに着目した。そして、彼は体育においてそのような人間の生成を論じる時、最終的に自己実現や自己形成へと焦点を絞っていく。即ち、人間は、その身体的、心理的、精神的な存在契機の連関において、常に自己をつくりあげ、自己実現を求めていく生成的な存在であると共に、そこには実存的な存在への伏線も見受けられ得よう。

高部岩雄（1：1966）の人間学的認識は、その文化論に見出される。彼は、文化と人間の相即不離性に着目し、文化は人間だけが作り出すものであり、人間は文化によって成長すると論じた。そして、文化をつくる人間の要素を存在のうちにある創造性に認めていく。即ち、人間は、文化を受容することによって生の実質を営み、それを継承することによって文化を維持するだけでなく、寧ろ文化を生き生きと築き、そこにおいて人間そのものを高めゆく。それはまさに人間の創造的な存在形態の一形式と言えよう。

加藤元和（1：1967）の人間学的認識は、その思想分析に見出される。彼は、近現代の西欧体育思想、とりわけ、カール・ディームを辿り、人間の自然性に着目し、人間は肉体的な実存だけでなく、精神的存在使命をも実現せねばならないと説く。即ち、人間の本質は、世俗的な有用性を超えて存在する絶対的な価値を目指し、それを追い求める姿にこそある。従って、人間であるということの意味は、生物としてそれであるということではなく、そのよう

な存在の在り方においてこそある。それはまさに人間の精神的な存在形態であり、これによって人間は無限に高まりゆくのである。

早川武彦（2：1968-1970）の人間学的認識は、その文化論に見出される。彼は、人間の欲求に着目し、そこに基本的欲求と歴史的欲求をみる。即ち、人間は、生活に必要な基本的欲求と、自らの生や生活をより豊かにしようとする歴史的欲求を有し、それらの連関において生の実質を営んでいる。彼は、とりわけ、歴史的欲求に着目する。それは、文化を生みだし自らをより豊かに創造しゆく重要な存在契機といえる。人間は、そのような生物的な契機と創造的な契機の二重性において存在しているという。

中和田武（1：1969）の人間学的認識は、その思想分析に見出される。彼は、西欧近代体育思想、とりわけ、グーテンホーフ・カレルギーを辿り、その新英雄主義的な調和論に着目する。即ち、人間の本質を調和にみて、肉体の鍛錬を通じて、肉体と精神の高次な調和をはかり、人間の本質を取り戻すことを説く。人間は、肉体と精神の調和においてこそ存在し、それはより高次な調和へと向けてスパイラルに高まりゆく。まさに、自らを鍛錬し、耕し、そして高まりゆく姿こそが、人間の在り得るべき存在形態なのかも知れない。

村岡真澄（1：1969）の人間学的認識は、その遊戯論・思想分析に見出される。彼女は、人間存在の文化的性格に着目し、そこに文化の創造にみる人間の超論理性に光を当てる。即ち、人間は文化的な存在であるとしても、そこには理性や論理では解明し得ない根源的な世界がある。このような形而上的な世界を源泉として、人間は文化を創造し、その生を豊かにしていくのである。彼女はそこにこそ人間の本質の一端をみるのである。

川村英男（2：1969-1990）の人間学的認識は、その体育論・人間形成論、文化論に見出される。彼は、人間は常に全一体としての存在に着目し、その全一体のエネルギーの現れこそが文化であるとみる。そして、その基盤には生の充実があることを思念し、自らを投企して拓いた充実という至高境地においてこそ、人間はようやく自己たり得ることを論じる。即ち、人間は、全一的エネルギーであり、生の充実を求めて自らを投企することによって開か

れる実存においてこそ、真の自己を実現し得るのである。彼は、そのような超越的・実存的なありかたを見つめていたのである。

浅井浅一（1：1969）の人間学的認識は、その体育論、人間形成論に見出される。彼は、人間の存在の一元的統一性に着目する。即ち、人間は、身体と精神を有するとしても、それらは分離できるものではなく、本来、一元的統一体なのであるという。

本間幸雄（2：1970-1971）の人間学的認識は、その体育論に見出される。彼は、人間を実存的主体として捉える。そして、人間が文化環境において主体的に価値を求め、自らに価値を創造し、それらを人格の次元へと高めゆくことによって、実存的主体性は人格的主体となる。そこに人間の社会的存在の根柢を探ることができる。即ち、人間は人格的主体として社会に存在し、その中核的基底が実存性なのであるという。

山本利則（1：1970）の人間学的認識は、その心身関係論に見出される。彼は、人間存在における精神と身体の一元的関係に着目する。即ち、人間の存在において精神と身体は遊離して存在するものではなく、理性的に一元化した状態に人間形成の基礎を認める。

山田知子（1：1971）の人間学的認識は、その文化論において見出される。彼女は、有限な人間が無限の時空へと挑むことによってつくられていく自己の在り方に着目し、そこに生の創造や、高まりゆく生成をみる。即ち、人間は、自らを投企し、そこに挑みゆくことによって、自らの有限性を超越し、無限の^{なか}崇まりへと生成しゆく。彼女は、このような超越的・実存的な在り方にこそ、人間の本質の一端をみる。

金井淳二（1：1971）の人間学的認識は、その体育論に見出される。彼は、類的存在としての人間に着目し、文化環境における共同性に光を当てる。即ち、人間は、一定の文化的環境において社会的に共同して生産諸活動を行いながら、そこにおいて人間的諸能力を実現していく。それはまさに人間存在に不可欠な文化的・社会的な在り方の一形式としてみることができよう。

藤田登（1：1972）の人間学的論理は、そのスポーツ論に見出される。人間

はよりよい生存を求める実存的な願望を有し、それによって技術を生み、自然や外界との対決行為を通じて、その生活を拡充してきた。技術を通じて外なる有形無形の障壁と対決し、それを乗り越えることによってよりよい生存を得るなかで、人間は自らの存在の可能性や主体性を無意識に感じ、そこに存在の充実を感じる。即ち、人間は、その存在の根底にある実存的な願望によってよりよい生存を求め、それを実現することによって自らの存在を愉び、享受する。彼は、そのような実存在的な在り方に、人間の本質の一端をみるのである。

鈴木アヤ子（1：1972）の人間学的認識は、そのスポーツ論に見出される。彼女は、人間の自由性に着目し、それによって人間の価値創造や自己表現が可能となることを思念する。即ち、人間は、その本質において囚われなく自由であるが故に、自己目的的に価値や意義を追求し、それを自らにつくりあげようとする。まさに人間の存在におけるうちなる自由は、創造的・実存在的な在り方を可能たらしめるのである。

中林信二（1：1972）の人間学的認識は、思想分析・心身関係論に見出される。彼は、日本の近現代思想、とりわけ西田幾太郎の思想を辿り、その行為的直観論に着目し、人間を超越的な存在とみる。人々は、自らを客体化することで無をつくり、世界に受動的に没入するなかで現存の自我を滅した時、ようやくそこに立ち現れてくる創造的な自己を直観し得るといふ。まさに自我の背進的没入によって開かれてくる絶対無において出会う真の自己こそが、人間の本質となる。それは、存在のうちなる深まりへの内的沈潜による自己探究であり、それはまさに人間の実存在的な在り方の一形式であるといえよう。

落合久子（1：1972）の人間学的認識は、その思想分析に見出される。彼女は、西欧近代思想、とりわけペスタロッチーを辿り、その全人陶冶に着目した。即ち、人間陶冶の究極像を全人とし、それを身体的完全性と精神的・道徳的完全性にみる。人間の陶冶された全き姿は神の似姿としてのそれであり、人間の存在の究極をそこにみるのである。

寺嶋善一（1：1972）の人間学的認識は、その思想分析、心身関係論に見出される。彼は、新たなキリスト教の人間観に着目し、その複合的全体性を説く。即ち、人間は、精神と身体に分ち難い複合体であり、それは常に全体性において捉えられなくてはならないという。当然のことながら、その全体性の完全な姿は神なのであるが。

浜口陽吉（1：1973）の人間学的認識は、その体育論、心身関係論に見出される。彼は、人間の生命を論ずる上で、人間全体観に立った心身一如に着目する。即ち、人間の生命は、身体と精神の観念的単純結合ではなく、躍動する全体性なのであるという。

山口順子（4：1973-1998）の人間学的認識は、その人間運動論、運動教育論、思想分析、学理論に見出される。彼女は、身体運動の多元的な要素による有機的な構成としての全体性に着目し、そこにある意味生成的な世界に光を当てた。人間は、身体運動において独自の世界が拓かれ、そこから意味が生成してくる、そのような存在でもある。まさに身体は独自の意味生成の土壌であり、そして独自の世界なのである。彼女のそれは身体論であるのみならず、生成の人間学へと読み替えることができる。

佐野裕（1：1973）の人間学的認識は、その思想分析に見出される。彼は、西欧近現代思想、とりわけマルクスとポルトマンを辿り、その世界に開かれた自己創造的な在り方に着目した。即ち、人間は、そのものが歴史的社会的存在でありながらも、その本質は感性的外界を対象化することによって自らを創造していく、そのような創造の可能性に開かれた存在であるという。

深沢宏（1：1973）の人間学的認識は、その遊戯論、思想分析に見出される。彼は、西欧現代思想、とりわけフランクを辿り、遊戯における人間の生の根源性に着目した。即ち、人間は、遊戯において根本的な生を顕現する。そして、それは決して仮象のものではなく、人間の実存そのものである。ただ、そこに顕わにされた根源的存在がいかなる様相を呈しているのかについては、それらからは推察することができない。

舩本直文（4：1974-1986）の人間学的認識は、そのスポーツ論、文化論、

思想分析、人間運動論に見出される。彼は、スポーツにおける実存に着目し、スポーツの実存の世界を隈無く探っていく。例えば、スポーツにおける主体的自己選択や自己決定、高次な価値を求めて投企し、それによってより豊かな自己を超越的に創造していくこと、絶え間なき前進的自己投企による真なる自己の探究、そして自我を根底から揺り動かし、心情的快感を遙かに超えた人格的状态としての幸福等を描き出した。おそらく人間は、スポーツにおいて自らを投企し、新たな生を創造しつつ、それを通じて自己を掘り下げ、探究し、自己を実現しながら、その存在を享受していくことができる。それはまさに人間の実存的な在り方の一形式なのである。

滝沢文雄（8：1974-1999）の人間学的認識は、その身体論、思想分析、教育授業論、人間運動論に見出される。彼は、西欧近現代思想、とりわけフッサールを辿り、その身体論に着目し、身体的存在としての人間存在を探っていた。例えば、身体の対世界関係や、文化としての身体性、そして身体的世界等は、所謂、生物的な身体論を超えた身体の人間学として捉えることが可能である。彼によれば、現実の人間は、身体と肉体が連続しているに留まらず、精神活動さえも身体に根ざしているという。この意味において、身体は開放された意味生成的世界であり、それ自体は既に「私」という生成しゆく自己と極めて近似なものと思われる。人間の身体はそのような存在であり、それは人間の実存を担うものである。まさに人間は身体的に存在する。彼の身体論はそのまま人間学と同値であり、それは「身体」という表現様式をまとった確たる人間存在論であるようにも思われる。

遠藤卓郎（5：1974-1993）の人間学的認識は、その身体論、思想分析に見出される。彼は、西欧近現代思想、とりわけメルロ＝ポンティを辿り、その身体論に着目し、身体的存在としての人間存在論を探っていた。例えば、そこに生じる意味形象に従って再統合されゆく世界としての身体、世界へと開かれている身体、そこで生を生きその全体が背景へと退きながら集約されている身体は、先の滝沢らと共に、所謂、生物的な身体論を超えた身体の人間学として捉えることが可能である。即ち、人間は、身体を通じて世界へと

参入していき、身体的な存在においてこそ世界内存在たり得る。そして、身体は、その身体の世界開放性においてその図式を再構成し続けながら文化を内在化し、それによって意味を生成していく独自の世界なのである。彼の身体論もまた、そのまま人間学と同値であり、それは「身体」という表現様式をまとった確たる人間存在論であるようにも思われる。

関良幸（1：1975）の人間学的認識は、その体育論に見出される。彼は、人間の存在における主体性の問題を探りながら、人間の本質的存在形式を身体に認めていく。人間は、身体として世界に内属し、身体においてこそ「私」であり得る。従って、「私」は身体であることによって世界と関わりを有し、世界内存在たり得ることができるのである。それは、人間が身体的存在であることの一形式であると言えよう。

難波邦雄（1：1975）の人間学的認識は、そのスポーツ論に見出される。彼は、そこにおいて人間の創造性に着目する。即ち、人間は、ただの生物に留まらない創造的な存在であり、それによって価値をつくりあげたり、それによって自己実現を成就したりすることができるという。

入口豊（1：1975）の人間学的認識は、そのスポーツ論に見出される。彼は、そこにおいて人間の自然性に着目する。即ち、人間は、その存在において本源的な内なる自然性を有し、それはあらゆる事物を生み出す生命力である。人間は、その内なる自然性にある創造的な生命力によって自らをつくりあげ、そしてあらゆるものを生み出していくのである。従って、ここでの人間の自然性とは、その生物的一般性を超えた文化的・創造的な存在形式をも含む。人間の自然とはそのように豊かであることに思い到らされるのである。

五十嵐優二（1：1976）の人間学的認識は、その思想分析に見出される。彼は、東洋思想、とりわけ天台の十界論を辿り、その「我」の思想に着目した。即ち、人間の存在の最奥のある「我」は、統一体としての人間生命であり、それは価値の源泉でもある。「我」が躍動することによって人間は物的世界を超えて普遍的世界へと誘われ、それが歓喜を覚えることによって価値は創造される。換言するならば、それは人間の奥に住み、そこに精神的世界を切

り拓いていく魂の創造的な躍動と言えよう。まさに、それは、人間が精神的存在性において価値を創造し、それによって普遍的な存在へと高まりゆく、そのような在り方である。

岡本研二（1：1976）の人間学的認識は、その身体論、思想分析に見出される。彼は、西欧近代思想、とりわけルソーを辿り、その身体を基盤とした人間把握に着目した。人間にとって身体が存在こそが根源的であるという。彼はそれを踏まえながら、人間の存在における精神と身体は二元的に分離し得るものではなく、両者は統一的に把握されなくてはならないと説く。

山市孟（1：1977）の人間学的認識は、そのスポーツ論に見出される。彼は、そこにおいて人間性を模索し、それを人間の自然性に求めていった。人間の自然性は、第一自然としての生物的なものと、第二自然としての文化的なものがあるとする。そして、人間性は、生物的自然性と文化性の調和において保持されていくとした。これによって、ここでは人間存在の生物的次元と文化的次元が描き出され、それらの調和において存在理念が論じられていく。

佐藤臣彦（3：1977-1996）の人間学的認識は、その思想分析、身体論に見出される。彼は、西欧古代思想、とりわけアリストテレスを辿り、その身体論に着目した。身体はまずもってそのうちに成長発達の原理を持つ自然的な存在である。そしてそこには可能態としての徳が存在する。従って、自然的な身体のうちにある可能態としての徳は、何らかの人為によって現実態としてその存在に創り出されなくてはならない。人為は自然を補充する。ここに体育が関わる身体があり、それは自然の生物的なものではなく、寧ろ文化的な身体である。従って、そこには自然性と文化性との二重性が存在する。人間としての生存の根底に身体的存在が前提とされている以上、それを自自然的身体から文化的身体へと高めていかななくてはならない。人間存在としての身体はまさにそのような二重性において捉えられる。

本田俊教（3：1977-1981）の人間学的認識は、その身体論、思想分析、スポーツ論に見出される。彼は、西欧近代思想や日本の現代思想、とりわけニーチェや市川浩を辿り、身体論を探ると共に、人間のもつ基本的特性として

の創造性にも着目していった。例えば、人間は身体において世界内存在であること、絶えず世界が再構成される主体として生きている身体、一つの大きな理性としての身体、自己としての身体、そして常に新たに創造されてはその都度超克されていく実存的身体等を描き出した。即ち、人間は、身体において世界と対峙し、そこにおいて自己を創造し、それを絶えず超越することによって真なる自己を探究していくのである。この意味において、人間はそのような身体的存在であると言えるかも知れない。

藤井陽江（4：1978-1982）の人間学的認識は、その体育論、思想分析、教育・授業論に見出される。彼女は、西欧近代思想、とりわけパスカルを辿り、その人間論に着目する。即ち、人間存在はまず現実的存在として生きて、やがて死する生命体としての自然的存在である。そして、その現存在は必然的な存在でも永遠な存在でもなく、安定なく均衡なく動きゆく存在であり、それ故に絶えず途上にある存在である。そして、この世に生をうけ、生涯を生きるということは、自らの存在を解き明かし、自分にしか与えられていない使命を察知し、全うすることである。即ち、人間の存在や生は、自己目的であり、主体的な自己探求と自己実現によって真の自己を実現しその生を全うすることにある。従って、人間は常に途上にある生成的な存在であり、それは自らがそれに挑み、自らの存在をつくりあげていく創造的で実存的な存在であるという。

一正孝（4：1979-1983）の人間学的認識は、その思想分析、身体論に見出される。彼は、西欧古代中世思想、とりわけアウグスチヌスや旧約聖書、そしてパウロを辿り、その身体論に着目した。即ち、人間は、精神と身体の完全なる統一体であり、その全体性において精神的身体的存在として捉えられる。又、パウロに従い、人間は身体によって生き、存在するが故に、身体は私自身の全人格を意味し、人間存在の全てを表すことも説く。そしてそこには、生命の器としての身体、行為の主体・手段としての身体、他者関係において実存する身体、人格的身体という階層性も窺い得る。つまり、身体は、生物的基盤でありながら社会的存在性を持ち、人格的主体でもある。何れに

せよ、人間は身体なしには生きられないし、実存し得ないのである。そのような身体においてこそ、人間は存在しているのであるという。

若林正光（2：1981-1982）の人間学的認識は、その心身関係論、身体論、思想分析に見出される。彼は、人間を実践的行為の主体として捉える。そして、人間は、その実践的行為において自己を表現し、それを通じて自らの生を自覚的に形成していく。即ち、人間は、行為において自らの生を表現しながら、絶えず新たな自己をつくりあげ、それを自らの存在に現成し続けていく。これはまさに、人間の創造的・生成的な存在形姿の一形式として捉えられる。

岡田猛（2：1981-1985）の人間学的認識は、その身体論、思想分析に見出される。彼は、西欧近代思想、とりわけホッブス、フォイエルバッハ、マルクスらを辿り、その身体論に着目した。身体は、人間存在の基礎構造であり、そこに三つの位相をみる。即ち、それらは生命の担い手としての身体、享受主体としての身体、実践主体としての身体である。これらの総体において人間は身体的存在であり得るという。

木村真知子（3：1982-1999）の人間学的認識は、その思想分析、教育・授業論、身体論に見出される。彼女は、人間の生命における個性性と根源性という二重性に着目し、とりわけ、生命の根源性に立脚点を求め、そこから単なる物質的存在を超えた根源的生命一般としての「からだ」の世界に光を当てていった。即ち、個体的生命は所与の物的世界に顕現した私という個別的具体的現象であり、それは人間の「からだ」を通じて物的世界を超えてその根底に脈々と流れゆく生命の普遍の世界へと開かれていく。自らの「からだ」が深まり、そして拡がりゆくことによって、私は人間の根源的な存在性へと導かれていくのである。それ故に、「からだ」は人間にとってつけたものではなく、それ自体が実存なのである。従って、人間の「からだ」は超個体的な根源的生命にチャンネルが開かれていくように開発されていかななくてはならない。換言するならば、それが生物的・生命的、そして文化・社会的にあるとしても、実存的・超越的な「からだ」へと開発されなくてはならないの

である。これによって、人間はその存在的根源に対する実存を得る。加えて、彼女は、スポーツにおける人間の在り方を、世界との対峙において自らを形成していくところに認める。そこには、自らを投企し、そこに生を創造していく実存的な在り方として捉えられる。これらを勘案するならば、そこには、人間の「からだ」を通じたうちなる深まりに沈潜し、そこにおいて生命の根源性へと迫りゆく内への実存と、世界へ対峙しそこから自らをつくりあげていく外への実存という二つの実存形式が窺われ得る。

片岡暁夫(2:1979-1988)の人間学的認識は、その体育論、スポーツ論に見出される。彼は、人間が社会的存在として文化との関わり、そこにおいて価値を求めゆくところに着目する。素朴な運動体としての人間は、社会的存在であることを通じて文化と結合し、それらを内在化し表現することによって次第に価値運動体としての人間に高まりゆく。文化の内在化は文化の維持・継承に留まらず、豊かな精神的契機として彼らの人間形成へと算入していくのである。それは、まさに価値創造的な存在形姿であり、価値と関わり自らを高めゆく文化的・創造的な在り方として捉えられよう。

服部百合子(1:1980)の人間学的認識は、その身体論、思想分析に見出される。彼女は西欧近現代思想、とりわけメルロポンティを辿り、その身体論に着目した。身体は、一方では一個の客体として諸事物の客体的存在連関の中に投げ込まれ、その根源的制約を負いつつも、この制約を超えて自己を世界に向けて投企する主体であるという。即ち、人間は身体として所与の世界にありつつも、その身体的存在性によって世界へと開かれ、そこに向けて投企し、それによって自らを超越していく存在なのであるという。

谷敏光(2:1981-1981)の人間学的認識は、その思想分析、身体論に見出される。彼は、日本の近代教育学思想、とりわけ篠原助一、羽田隆雄、佐藤通次を辿り、その身体論に着目した。即ち、彼は、篠原に従い意志の表現形態としての身体を、羽田に従い経験としての身体を、佐藤に従い次元階層的な身体を描き出した。そして、佐藤の身体論に基づき、主体性の程度によって物体から肉体そして身体という次元階層性に立脚し、最高次レベルの身体

は主体性が発揮され高められた人格としての真の身体とした。自己の身体は、まさにこの人格的な身体である。人間はこのような次元階層的な身体的存在であるという。

木村はるみ(1:1980)の人間学的認識は、その思想分析、舞踊理論に見出される。彼女は、西欧近代思想、とりわけニーチェを辿り、その身体(肉体)論に着目した。即ち、肉体を生命の根源と解し、心さえもそこに還元する肉体一元論に立脚し、ギースに従い肉体=自己という等式に同調する。これによって、肉体は、ただの生物的・物理的なものを超えた人格的な存在形式と近似値をとる。これによって、人間は、自己としての肉体的存在として描かれていくのである。このような彼女の身体論も、その意味する処は確たる人間存在論として捉えられる。

高部岩雄(1:1981)の人間学的認識は、その学理論、概念論に見出される。彼は、体育の対象としての身体運動を社会的存在としての個人の身体運動とした。そして、それを正しく捉える為に、そこに身体、心理そして社会という視座を設定した。人間の存在現象を把握する為に、多元的な視座を設定する試みは、相応の説得力を有するようと思われる。

牧野共明(1:1982)の人間学的認識は、その教育・授業論、スポーツ教育論に見出される。そこにおいて彼は人間を全的人間として捉えた。そして丹羽に従い、そこに健康体力と関わる生物的存在性、社会生活と関わる社会的存在性、自己実現に関わる実存的存在性を認めていく。人間が全体的な存在であり、それを重層的に把握していく試みは、相応の説得力を有するものと思われる。

内山治樹(1:1982)の人間学的認識は、その思想分析、文化論に見出される。彼は、近現代西欧体育思想、とりわけグロルを辿り、その身体論や心身関係論に着目した。そこでは、人間は、一つの精神的で物質的な統一体であり、一つの絶対的な実体として捉えられている。即ち、人間の肉体と精神は、それぞれ不完全な実体であり、それらはただ単に、そして同時に完全な実体としての人間においてのみ存在することができるのである。

豊嶋建広 (3:1983-1985) の人間学的認識は、その思想分析、身体論に見出される。彼は、西欧近代思想を辿り、そこにみる身体の人格性に着目し、次いで日本現代思想、とりわけ市川浩の身体論を辿り、そこに潜む身体の階層性に着目した。特に、西欧近代思想に従い、身体の存在的全体性、身体にみる人格性や主体性、そして身体の存在的自己同一性等を描き出し、そして市川に従って身としての人間存在に、自然的存在、社会的存在、そして全体的存在という階層性を認めた。それらは、人間の身体的な在り方の一形式として捉えられよう。また、身の階層性は、そのまま人間存在論へと読み替え得るように思われる。この意味において、このような身体論は人間学と近似値をとる。

小林日出至郎 (2:1983-1985) の人間学的認識は、その思想分析、心身関係論に見出される。彼は西欧古代思想、とりわけプラトンを辿り、その心身関係論に着目した。彼は、生きている人間は、身体と魂が一体となった存在であるとする。人間は、精神と肉体が一体となって生命活動を営んでおり、精神が肉体に宿るとき、人間は始めて生命の誕生を迎えるという。

斎藤篤司 (1:1983) の人間学的認識は、そのスポーツ論に見出される。そこにおいて、彼は社会的存在としての人間存在に着目する。即ち、人間は、社会的組織に位置することによってのみ生活を維持し、社会的学習による成育を欠いて人間たり得ないとする。人間は、生物としての存在から最も人間的な存在に至るまであらゆる場面において他者を要請する。それはまさに、人間の社会的存在としての一つの存在形態である。

平井章 (1:1984) の人間学的認識は、その教育・授業論に見出される。そこにおいて、彼は、人間が生物的存在であると同時に心理的・社会的存在であり、さらには文化的条件によって規定される存在であるとした。そして丹羽に従ってその本質的特徴を実存的存在として捉え、それを階層的に把握した。即ち、人間は、生物的存在から社会的存在そして実存的存在へと至る連続性を持ち、それぞれが不可分に結合しながらも相互補完しあう三層構造を持つ存在であるという。

川口智久（1：1985）の人間学的認識は、そのスポーツ論に見出される。そこにおいて、彼は真の人間らしい生き方を探究し、文化の有効性に着目する。即ち、人間のより人間らしい発展の為には真の文化の獲得・形成が望まれる。人間は文化と関わり、それによってより人間らしい存在へと高まりゆくという。そこには、人間の文化的・創造的な在り方の一端が窺われ得よう。

岡出美則（1：1985）の人間学的認識は、その思想分析、身体論に見出される。彼は、西欧現代体育思想、とりわけグルーベを辿り、その身体論に着目した。そこでは、人間が自らの身体に対する関係を自己の積極的関与を通して築いていくことを義務づけられた存在として捉えられる。そして、人間は、身体保有のみならず身体存在として、身体を媒介として自己が世界へと開かれていくという。それは、まさに人間の身体的な在り方の一形式として捉えられよう。また、身体存在の論理は、身体論であるに留まらず、人間存在論として読み替え得る。それは身体論という衣をまとった確たる人間学として捉えられる。

北村勝朗（1：1989）の人間学的認識は、その思想分析、心身関係論に見出される。彼は、東洋近代思想、とりわけ陶行知を辿り、その生成的な心身関係論に着目した。そこでは、人間が常に自覚的に形成・展開しつつある未成熟な存在として捉えられ、優れた陶冶性によって人間的諸価値を積極的に受容し、それによって自らの人間性そのものを創造していく。心身一致した活動において自己はあり、それこそが人間の価値形成の源泉となる。そしてそこから湧き出る価値によって自らの存在をその生につくりあげていく。即ち、人間は、単にあるのではなく、常に成りつつある、そして形成を展開しつつある展開過程にある。それは、まさに人間の生成的・創造的な在り方にこそ、人間の本質の一端がみられる様に思われる。

来栖寛（2：1989-1992）の人間学的認識は、そのスポーツ論に見出される。そこにおいて、彼は、人間が世界に投げ出されながら一つの存在可能性として自らを投企し、それによってその存在の本来性に向けて超越していく在り方に着目する。スポーツにおいて人間は確かにその世界に存在していること

を知り、物理的時間を超えて「いまそのもの」に存在し、「ここで」ありのままの自己が顕現する。そこには、人間の実存的な存在形式の一端が窺われよう。

関春南（2：1989-1990）の人間学的認識は、そのスポーツ論に見出される。そこにおいて、スポーツという営みは、主体である人間が、客体である対象に働きかけ、対象を変革・克服すると共に、主体である自己自身を変革し創造する過程であるとしている。それは、まさに人間としての自己実現の過程であり、自己表出という人間的自由実現の営みに他ならないという。従って、そこにみる人間の形姿は、それを自ら克服し、自己を創造し、そして自己実現を成就しようとする実存的・創造的な存在の一形式として捉えられよう。

加藤泰樹（2：1991-1995）の人間学的認識は、その身体論、授業理論に見出される。そこにおいて、彼は人間の身体性を階層的に捉え、生物的な次元、社会的次元、そして価値的次元を設定した。そして、授業を意味生成－価値実現のプロセスとしてよみ、価値的次元を注視していった。従って、そこにみる人間の形姿は、意味や価値を生成し、自らの存在において実現していく創造的・実存的な存在の一形式として捉えられよう。

石川旦（1：1993）の人間学的認識は、その生涯体育論に見出される。そこにおいて、彼は人間を個人として捉え、自然的生物的存在であるのみならず文化的社会的存在として、その人独自の生きる目的を持って生活していることに着目する。そこには、意味や価値との関わりを有する精神的な在り方の一端が窺われる。

工藤英三（1：1994）の人間学的認識は、その人間論に見出される。そこにおいて、彼は、人間を身体的自立、精神的主体、社会的存在という視座から把握しようとしている。無論、ここでの身体的自立を言葉通り受け取るのは些か人権上の問題があるにせよ、人間の存在を生物的な身体、精神的な存在性、社会的な存在性の三契機から把握しようとする試みには、それなりの説得力を感じる。

原田憲一（1：1997）の人間学的認識は、その人間運動論に見出される。そ

ここにおいて、彼は、人間の運動における身体と世界との関係を論じる。即ち、人間が運動するという事は、運動という一つの形式を用いて、身体と世界との直接的関係を改善していくことでもあるという。まさに人間は、身体を媒介して世界へと開かれ、世界へと働きかけている。そこにみる人間の形姿は、自らが世界と対峙し、そこに関わりながらその関係を創造していく身体としての存在形姿である。これによって、世界へと開かれ、そこに自らを投企しながら、新たな生を創造していく身体的存在の一形式が照らし出される。

矢野智司（1：1989）は教育学者である。彼が体育学に投げかけた人間学的認識は、その人間運動論に見出される。そこにおいて、彼は、運動体験を意味生成のプロセスにおいて捉える。即ち、運動には理性的把握を超えた次元があり、それは発達の倫理や有用性の論理に還元できない次元であり、そこにおいて人間は世界そのものとの境界が溶解し、そこにおいて人間は、世界そのものに全身において関わり、世界との連続性を吟味することができるという。このような溶解体験によって人間は社会的価値や有用性に捕らわれない次元で、生きていることの原理に触れることができるという。そして、そこから存在の意味が啓かれ、そして生成されてくる。従って、そこにみる人間の形姿は、意味を生成し、そして自らを世界と融合させることによって自らの存在をしる、そのような創造的・超越的な存在形姿である。

平田友子（1：1999）の人間学的認識は、その舞踊理論、思想分析に見出される。彼女は、西欧近代思想、とりわけグルジェフを辿り、運動論と心身論に着目した。そして彼女は、心身全体の統一にみる自己の沈潜凝集への気付きと、その制御によって得られる自由の拡大、それによって拡がりゆく自己実現の世界を照射した。そこにみる人間の存在形姿は、なるほど実存的な在り方の一形式といえよう。

以上、これまで論者ごとにその人間学的論理を辿り、その素描を試みてきた。各々によって提示された人間学的認識は、体育を論じる上で極めて有効

な視座として確固たる体育学的位置づけを得ることであろう。無論、各々の人間学的な論点は、それぞれの論者が当該研究において照射した局面であるに過ぎず、そのみをもって彼らの人間学的認識を定式化するのは早計である。ただ、そこに窺われる人間学的認識は、それ自体、体育学における人間学的領域に寄与し得る有効な知的契機であることは疑いない。それ故に、一見、散逸しているかのように見受けられるそれらの知的契機を、改めて集積し、その知的様相をまとめ上げ、体育学における人間学的領域を可視的に把握可能な全体像として素描していきたい。

2.2. 体育学における人間学的蓄積の様相とその概観

ここでは、これまで個別に辿ってきた人間学的論理とその認識の様相を、改めて体育学における人間学的問題設定のもとに集積し、そこに映ずる全体像を概観していく。但し、各々の人間学的論理には、その論者に特有の知的必然性があり、それが同一名辞であるとしても、その概念には少なからず相違がある。それらを弁えず無思慮に分類操作をしても、原著者の本意との間に著しい乖離が生じる可能性がある。加えて、著しく誤まれる解釈によってその意味内容を押し量り、それらの集積によってある像をかたちづくったとしても、誤訳の集積には何ら学的有用性が認められないことであろう。従って、ここでの操作は可能な限り慎重を期さなくてはならない。

さて、先ず分類操作の端緒として、各々の論者が意識的に用いてきた人間学的認識、あるいは彼らの人間学的認識の明確な注視対象の主なものを拾い上げてみたい。それらの各々は、全体的存在、一元的存在、統一的存在、調和的存在、自然的存在、生物的存在、肉体的存在、身体的存在、社会的存在、文化的存在、精神的存在、創造的存在、超越的存在、形而上的存在、実存的存在、生成的存在という名辞形式として挙げられよう。これらを、一先ず体育学における人間学的蓄積の知的契機として捉え、それらを等しく個別のものとして扱っていききたい。無論、それらの各々は概念が重複するものもあるように思われるが、差し当たり原著者の人間学的意識を尊重して、ことを進

めていきたい。そして、それらを概観することによって、体育学における人間学的領域の大まかな地形図が浮かび上がってくることであろう。そこで、それらを類型的に分類して、その全体像の洗い出しを試みたい。

まず、それらの人間学的契機の各々に、そのおよその意味内容の類似性・近似性から、大まかな枠付けを施したい。これによって、体育学における人間学的蓄積は、次の五つの枠組みに分類し得るように思われる。第一に、全体的存在、統一的存在、調和的存在を中心とした枠組みである。第二に、自然的存在、生物的存在、肉体的存在、身体的存在を中心とした枠組みである。第三に、社会的存在、文化的存在を中心とした枠組みである。第四に、精神的存在、創造的存在を中心とした枠組みである。第五に、超越的存在、実存的存在、形而上的存在、生成的存在を中心とした枠組みである。そこで、各々の枠組みを個別にみていきたい。

第一の枠組みは、全体的存在、一元的存在、統一的存在、調和的存在の論理に代表される。これらの知的契機のおよそは、心身関係論に源流をみることができ。即ち、それらには、人間の存在における身体と靈魂、肉体と精神等々の関係を追求するなかで、人間の存在を論じようとしたものが多い。無論、それを厳密に追うならば、平行一元論や二元論と立場の分かれる部分もあるが、何れの立場にせよその人間学的認識はそれらの調和性や統一性に一致をみることができよう。

第二の枠組みは、自然的存在、生物的存在、肉体的存在、身体的存在の論理に代表される。これらの知的契機のおよそは、主に生物的人間論、近現代西欧身体論や現象学理論等に源流をみることができが、それぞれが立場と様相を異にする。先づ生物的人間論の系統は、まさに人間の生物的自然性、有機的生命体としての在り方を照射する。ここでは、人間を生物的一般性において抽象する。次いで、近現代西欧身体論や現象学理論の系統は、人間存在を身体的存在とほぼ同値なものとして捉え、それによって開かれていく人間現象一般を身体存在論に回収していく。例えば、世界内存在の契機としての身体や意味生成的な世界としての身体、世界開放的な身体、その都度乗り越

え創りあげられていく存在としての身体、内なる実存へとチャンネルが開かれた身体の論理等は、無論、一元的に整理し得るものではないが、それらは身体としての人間存在の意味を開拓し、そして拡充するものである。この限りにおいて、そのような身体論は人間学と近似値をとる。

第三の枠組みは、社会的存在、文化的存在の論理に代表される。これらの知的契機のいくつかは、主に文化理論等に源流をみることができる。無論、社会的存在と文化的存在は全く同値ではない。即ち、人間が、所与の社会に制約されながら、その文化の諸形式を身にまとうことによって生の実質を営み、その社会において生を遂行している。社会的存在は所与の文化の介在によって成り立つ。この意味において、社会的存在は文化的存在と近似的であり得る。ここでは所与の文化空間に生をうけ、それ特有の文化をまとい、人間として生を具体的に遂行する存在局面が照射されるのである。

第四の枠組みは、精神的存在、創造的存在の論理に代表される。これらの知的契機のおよそは、主に心身関係論や文化理論、宗教思想等に源流をみることができる。それらは、人間存在の内面的な世界に光を当てるものである。精神とは心理や情緒といった生物的な刺激反応経路のことではなく、例えば神が与え給うた万物生成の源泉であり、そこにおいて自己があり、その躍動によって価値やよさを知り、そこに価値や意義を創りだしていくような価値創造的な世界である。これによって、人間は自らの存在のうちに価値を創り、よさや意義を知り、そうすることでようやく文化を創造的に享受し、その存在によりよい生を創りあげようとする。そして、これによって、人間は価値の世界へと連なり、その内界の深まりによって豊かさへと歩みゆく。即ち、価値創造はやがて自己創造にも繋がり、精神的存在は創造的存在の様相をも呈することとなる。

第五の枠組みは、超越的存在、実存的存在、形而上的存在、生成的存在の論理に代表される。これらの知的契機のおよそは、主に近現代西欧思想や宗教思想等に源流をみることができる。それらは、現存在を超えて自らを投企し、そこにおいて人間存在の最奥に育まれた豊かな自己が、その存在に実現

され、それによって高まりゆく人間の存在形姿が照射される。そして、そのような生成の道はやがて神なる絶対普遍の宇宙へと繋がりゆき、彼らはその存在において大宇宙を実現する。人間は、そのように現存在における諸々の矛盾や疎外を克服しながら超越的に高まりゆき、やがて自らに神へと通じる世界を切り拓いていく。この意味において、人間は生成的存在であり、その生成の方途は超越的・実存的であり、そして高まりゆき、そしてやがて全きものと融和していくコスモロジーを思念する時、人間はまさに形而上的存在として捉えられていくのかも知れない。

以上、体育学におけるそれまでの人間学的認識を、学会大会研究抄録集の分析を通じてそこにおおよそ五つの枠組みをみることができた。それは、無秩序な集積に映える単なる同系色の色彩であり、それらの厳密な検討はそこから始まる。即ち、これを一先ずの作業仮説としながら、更に分析対象文献を拡充することによって、体育学における人間学的領域の土壌の様相をより明確な形で把握しなくてはならない。それによって、体育学がそこに潜在的に提示し、積み重ねてきた人間学的認識とその全体像をより明確に対象化することができることであろう。

2.3. 体育学における人間学的認識の略図素案

体育学における人間学的蓄積の枠組みは、人間学的契機のおおまかな意味内容によって水平的に分類したものである。そこで、これまでの分類操作によって描かれた人間学的契機のおよそのものの相対的關係を整理し、それを概観したい。認識の拡がりに整理を施す為には、何らかの操作原理が必要となる。一先ず、ここでは、人間が生成しゆくことによって存在は単なる生物から普遍的な存在へと高まりゆくこと、そして精神において現実の相対的世界と対峙しつつ、同時に遙かなる絶対的世界へと繋がっていることを思念し、それらの整理の方策の一つとして、人間学的認識の地平を生成的存在性と精神的存在性という二つの契機から構造的に捉えることとしたい。これによって、先ず、そこに個性性と普遍性を両極にもつ生成的存在性の連続線と、絶

対性と相対性を両極にもつ精神的存在性の連続線が描かれていく。そして、それらの二元的交錯によって、体育学における人間学的認識領域は四つの象限に区分されていく。それに従って、それぞれの人間学的契機は次のように措定されていくこととなろう。

第一に、交点から個性性へと向かう生成的存在性の連続線には、生物的存在の論理が位置する。第二に、交点から普遍性へと向かう生成的存在性の連続線には超越的・実存的存在の論理が位置する。第三に、絶対性と相対性を両極にもつ精神的存在性の連続線には、言葉通り、精神的存在の論理が位置する。第四に、交点から普遍性へと向かう生成的存在性の連続線と相対性へと向かう精神的存在性の連続線によって区分された象限には、文化的存在性が位置する。第五に、交点から個性性へと向かう生成的存在性の連続線と相対性へと向かう精神的存在性の連続線によって区分された象限には、社会的存在の論理が位置する。第六に、交点から個性性へと向かう生成的存在性の連続線と絶対性へと向かう精神的存在性の連続線によって区分された象限には、創造的・価値理念的存在の論理が位置する。第七に、交点から普遍性へと向かう生成的存在性の連続線と絶対性へと向かう精神的存在性の連続線によって区分された象限には、実存的・人格的存在性の論理が位置する。これによって、おおよその人間学的契機が同一平面上に整理され得るように思われる。そして、前述において明示された枠組みは、それらの観念的交錯によって副次的に描かれていくこととなろう。

これらを更に大づかみにみていくならば、交錯軸をもとに上方にはコスモロジー系人間学が、右方には社会・文化理論系人間学が、下方には生物学理論系人間学が、左方には創造的・実存的理論系人間学が領域を主張するものと思われる。

以上、粗雑な理論構築で体育学における人間学的認識領域の様相を概観し、それをおおよその見取図を作成すべく略図に整理することを試みてきた。しかしながら、それは先の如く、一先ずの作業仮説として捉え置き、それに対象文献の拡充をはかり、そこに更なる批判・検討を重ねながら、より確立し

たものへと高めていかななくてはならない。

3. 結 語

体育学が体育をより厳密に、そしてより精緻に論じていく為には、やがては人間存在の問題へと突き当たってしまう。そして、そのような人間学の問題は、体育学において不可避であるばかりでなく、前述の如く、極めて重要な学的課題として捉えられる。従って、体育学は、人間学の問題を正しく位置づけ、その学的有効性を正しく認識し、その問題領域を耕していかななくてはならない。この意味において、これまでうみ出されてきた体育学的知識の中に人間学的資料を見出し、そこにより正しい学的形式を付与していくことは重要な学的課題の一つであるように思われる。それ故に、体育学に広汎な知識領域に散在していると思われる人間学的契機を、改めて人間学的な問題設定のもとに集積し、それらに整理を施すことが必要となろう。それは、やがて体育学における人間学の問題領域の発展と確立に繋がっていくように思われる。

4. 註および引用・参考文献

- (1) 日本体育学会 (1957) 体育学研究法, 杏林書院, p.1.
- (2) 岸野雄三 (1987) スポーツ大事典, 大修館, p.538.
- (3) Siedentop, D. (1977) Physical education-introductory analysis-, Wm. C. Brown Company, pp.51-54.
- (4) 岸野雄三 (1977) スポーツの科学的原理, 大修館, p.86.
- (5) Döpp-Vorwald, H. (1967) Erziehungswissenschaft und Philosophie der Erziehung, A. Henn Verlag, S.360.
- (6) Döpp-Vorwald, H. (1949) Organologische oder anthropologische Grundlegung der Erziehungswissenschaft?, Philosophische Studien, 1-2 : 376.
- (7) Reble, A. (1959) Menschenbild und Pädagogik, Die Deutsche Schule-Zeitschrift für Erziehungswissenschaft und Gestaltung der Schulwirklichkeit, 51-2 : 66.

- (8) 今村嘉雄 (1970) 日本体育史, 不昧堂, p.578.
- (9) 谷村辰巳編 (1970) 体育学研究文献分類目録 (第1巻), 不昧堂, pp.13-23.
- (10) 文中に記す括弧内の数字は, 当該研究件数とその発表年である. 従って, 複数に亘る場合は年を通して記してある. 間違っても, 論者の生没に関わる記述ではない.

5. 分析対象文献

- 木村静雄 (1951) 体育の哲学的考察, 体育学研究, 1-1:4.
- 安仲卓文 (1957) 体育観の研究——常識論的体育観に就いて——, 体育学研究, 2-7:7-8.
- 安仲卓文 (1963) 現代体育と人間観, 体育学研究, 8-1:396.
- 石橋武彦他 (1957) ヤーンにおける場の刺激布置(2) ——TURUNENとペスタロッターのGELENKUBUNGEN——, 体育学研究, 2-7:11-12.
- 石橋武彦 (1960) Frobel, F.における体育思想の系譜論, 体育学研究, 5-1:12.
- 石橋武彦 (1961) 17世紀における実学的体育観の史的意義, 体育学研究, 6-1:5.
- 佐々木久吉 (1957) Herman Altrockの体育思想——Rhythmusの概念を中心として——, 体育学研究, 2-7:175-176.
- 佐々木久吉 (1958) Herman Altrockの体育観, 体育学研究, 3-1:5.
- 佐々木久吉 (1959) Herman Altrockの体育観 (III), 体育学研究, 4-1:243.
- 天野美亀雄 (1957) マヌの法典に見る肉体観, 体育学研究, 2-7:176.
- 谷岸博 (1958) プラトンの思想体系における歌舞の位置, 体育学研究, 3-1:1.
- 本村増太 (1958) 機械文明と体育価値の顛倒, 体育学研究, 3-1:4.
- 阿部忍 (1959) 心身相関における無の現代的解釈について, 体育学研究, 4-1:238.
- 阿部忍 (1960) 体育における全体的総合の概念, 体育学研究, 5-1:5.
- 阿部忍 (1961) 体育における人間形成の可能性とその限界, 体育学研究, 6-1:152.
- 阿部忍 (1962) 体育の科学哲学的考察, 体育学研究, 7-1:304.
- 阿部忍 (1963) 現代体育と人間観, 体育学研究, 8-1:396.
- 阿部忍 (1964) 現代社会における体育の機能——個人の立場から——, 体育学研究, 9-1:427.
- 阿部忍 (1966) 体育哲学の方法について, 体育学研究, 10-2:1.
- 阿部忍 (1967) 学校体育における身体づくりの意義について, 体育学研究, 11-5:7.
- 阿部忍 (1968) 体育哲学の課題——心身相関の新たな問題——, 体育学研究, 12-5:272.

- 阿部忍 (1970) 体育哲学の構造, 体育学研究, 14-5:3.
- 阿部忍 (1971) 身体の哲学的考察, 日本体育学会第22回大会号, p.4.
- 阿部忍 (1975) 感性の体育について——「科学主義」的体育批判——, 日本体育学会第26回大会号, p.73.
- 阿部忍 (1984) 21世紀に体育は生き残れるか——体育の科学的研究の動向との関連から——, 日本体育学会第35回大会号, p.71.
- 阿部忍 (1985) 文化としての大学スポーツ——大学体育正課必修との関係から——, 日本体育学会第36回大会号, p.72.
- 阿部忍 (1987) 西田哲学における身体論, 日本体育学会第38回大会号, p.47.
- 阿部忍 (1988) 体育学研究のholisticな考察, 日本体育学会第39回大会号, p.38.
- 阿部忍 (1990) 教養としての死とスポーツ, 日本体育学会第41回大会号, p.49.
- 阿部忍 (1991) 心身相関の問題——務台哲学を越えうるか——, 日本体育学会第42回大会号, p.95.
- 阿部忍 (1992) 人間科学としての心身関係, 日本体育学会第43回大会号, p.97.
- 阿部忍他 (1993) 生涯体育の原理, 日本体育学会第44回大会号, p.61.
- 見形道夫 (1959) 中世のHumanism的人間像, 体育学研究, 4-1:239.
- 見形道夫 (1965) 体育における人間形成の基本構造, 体育学研究, 10-1:53.
- 見形道夫他 (1969) 現代体育の哲学的反省, 体育学研究, 13-5:10.
- 草野清子 (1960) 「舞踊と体育」1・モダンギムナスティックと舞踊その1・ボーデの「機械時代のリズム」について, 体育学研究, 5-1:3.
- 草野清子 (1961) 教育の手段としての舞踊の価値, 体育学研究, 6-1:148.
- 草野清子 (1962) 「舞踊と体育」1・モダンギムナスティックと舞踊その2・モダンギムナスティックの実態, 体育学研究, 7-1:308.
- 石坂均 (1960) 古代ギリシアに於ける体育成立の基盤(4報) その民族的特性について, 体育学研究, 5-1:7.
- 石津誠 (1961) 体育における現象的限界, 体育学研究, 6-1:151.
- 石津誠 (1962) 体育における現象的限界(3), 体育学研究, 7-1:305.
- 石津誠 (1963) 運動の行動機構とその要素, 体育学研究, 8-1:302.
- 石津誠 (1966) 運動の行動機構とその要素(2), 体育学研究, 10-2:25.
- 石津誠 (1969) 体育と人間形成——その可能性と限界(3) 現象論的立場から, 体育学研究, 13-5:385-386.
- 原田碩三 (1961) ルソーの体育思想, 体育学研究, 6-1:149.
- 近藤英男 (1961) スポーツの実存的構造, 体育学研究, 6-1:150.
- 近藤英男 (1963) 労働と遊戯, 体育学研究, 8-1:296.
- 近藤英男 (1966) グーデンホーフ・カレルギーの体育観について, 体育学研究, 10-

2:3.

- 近藤英男 (1967) スポーツモラルについて, 体育学研究, 11-5:14.
- 近藤英男 (1972) ホモ・ファルデン (HOMO FALDEN) の提唱——労働遊戯的人間——, 日本体育学会第23回大会号, p.19.
- 近藤英男 (1983) スポーツにおける時の構造——道元の「有事」との関連について——, 日本体育学会第34回大会号, p.76.
- 近藤英男 (1985) 身体論の系譜I——身体文化の原点としての東洋的身体論——, 日本体育学会第36回大会号, p.58.
- 近藤英男 (1987) 東洋的身体文化の伝統と現代スポーツ, 日本体育学会第38回大会号, p.8.
- 近藤英男 (1989) スポーツ空間——非在・実在 (世界)・非存・実存 (世界)・世界内存在より宇宙内存在へ——, 日本体育学会第40回大会号, p.84.
- 近藤英男 (1993) スポーツ概念の再検討——習合としてのスポーツ論——, 日本体育学会第44回大会号, p.104.
- 小林信次 (1962) 舞踊美を形成する内面的性格について, 体育学研究, 7-1:307.
- 小林信次 (1966) ダンスの個性的体育価値について, 体育学研究, 10-2:20.
- 篠田基行他 (1963) ローマ思想家達の体育思想史的研究 (第三報)——特にセネカの幸福論における身体観について——, 体育学研究, 8-1:89.
- 篠田基行他 (1964) ローマ思想家達の体育思想史的研究 (第四報)——ルクレチウムにおける身体観と心身相関の諸問題, 体育学研究, 9-1:227.
- 篠田基行 (1971) 体育的活動と人間らしさの確保について, 体育学研究, 15-5:2.
- 篠田基行 (1971) 詩人・村野四郎のスポーツ観, 日本体育学会第22回大会号, p.22.
- 篠田基行 (1975) 体育哲学の基本構想, 日本体育学会第26回大会号, p.74.
- 篠田基行 (1985) 現代社会に果たし得る体育やスポーツの役割, 日本体育学会第36回大会号, p.10.
- 篠田基行 (1988) ヒューマニズムとオリンピックの根本精神, 日本体育学会第39回大会号, p.37.
- 篠田基行 (1989) ヒューマニズムとスポーツ——自然主義=人間主義に立つ受苦思想——, 日本体育学会第40回大会号, p.83.
- 篠田基行 (1991) ヒューマニズムとスポーツ——ド・ラ・メトリの身体組成と科学認識——, 日本体育学会第42回大会号, p.87.
- 篠田基行 (1992) ヒッポクラテス学派の自然認識と技術愛, 日本体育学会第43回大会号, p.98.
- 浅田隆夫 (1965) 教育における体育の位置, 体育学研究, 10-1:308-309.
- 浅田隆夫 (1986) 身体と文化——知育・徳育・体育の現代的課題「発育体育学の立

- 場から」——，日本体育学会第37回大会号，p.13.
- 下津屋俊夫（1958）体育哲学の形而上的課題，体育学研究，3-1:2.
- 下津屋俊夫（1966）東洋哲学の特色より見た身体観体育観について，体育学研究，10-2:2.
- 下津屋俊夫（1967）東洋哲学の特色より見た身体観について「其二各論」，体育学研究，11-5:10.
- 下津屋俊夫（1968）理論体育学における身体観の哲学的思惟，体育学研究，12-5:268.
- 下津屋俊夫（1969）東洋哲学の特色より見た身体観（其四）一体観の意義と身体観について，体育学研究，13-5:13.
- 下津屋俊夫（1970）東洋哲学の特色より見た身体観（其五）——理萬殊と身心一元論について——，体育学研究，14-5:8.
- 下津屋俊夫（1971）東洋哲学の特色より見た身体観と体育哲学（其六）身心一如の「行」の哲理について，体育学研究，15-5:3.
- 下津屋俊夫（1971）実践哲学としての体育哲学概観——東洋哲学の特色より見た（其七）汗の体験より生命の源泉へ，日本体育学会第22回大会号，p.21.
- 北田明子他（1966）Mitchellの遊戯説 The Self-expression theory について，体育学研究，10-2:24.
- 北田明子他（1969）遊戯研究その2——米国における Play Movement の社会的背景から——，体育学研究，13-5:2.
- 北田明子他（1970）遊戯研究（その3）——“Homo Ludens” にみられる遊戯観について，体育学研究，14-5:8.
- 北田明子（1974）遊戯研究7 Eugen Fink における遊戯論，日本体育学会第25回大会号，p.117.
- 北田明子（1975）J. Henriot における遊戯の現象学的考察，日本体育学会第26回大会号，p.65.
- 北田明子（1988）遊戯の研究——存在論的遊戯論から——，日本体育学会第39回大会号，p.32.
- 北田明子（1990）「遊ぶ主体」の二重構造，日本体育学会第41回大会号，p.60.
- 北田明子（1991）遊戯における自由の意味，日本体育学会第42回大会号，p.88.
- 永井康宏（1966）体育のメカニズムについて，体育学研究，10-2:26.
- 高部岩雄（1966）運動文化の研究（第二報），体育学研究，10-2:27.
- 加藤元和（1967）Carl Diem の思想体系その3，体育学研究，11-5:21.
- 早川武彦他（1968）スポーツの現代化の研究（その2）国民運動文化からみた国民体育大会のあり方，体育学研究，12-5:266.
- 早川武彦（1970）「国民体育」の理念とスポーツ大衆化論，体育学研究，14-5:4.

- 中和田武（1969）グーデンホーフ・カレルギーの体育観について（その3）——技術革新の時代における人間像と体育——，体育学研究，13-5:3.
- 村岡真澄（1969）祭礼の本質としてのLudens（遊戯）と体育——Homo Ludensを中心に——，体育学研究，13-5:16.
- 川村英男（1969）体育と人間形成——その可能性と限界(1) 宗教的・芸術的立場から——，体育学研究，13-5:383-384.
- 川村英男（1990）日本の伝統文化における体育原理，日本体育学会第41回大会号，p.7.
- 浅井浅一（1969）体育と人間形成——その可能性と限界(2) 体育学の立場から——，体育学研究，13-5:384-385.
- 本間幸雄（1970）体育における態度形成過程について——特に価値構成を中心に——，体育学研究，14-5:5.
- 本間幸雄（1971）体育における態度形成過程について——その変容とは——，日本体育学会第22回大会号，p.11.
- 山本利則他（1970）体育における心身一如の集中的行為の意義——その1——，体育学研究，14-5:11.
- 山田知子（1971）稽古考——すぐれるということについて——，日本体育学会第22回大会号，p.23.
- 金井淳二（1971）「体力論」の「人間観」，日本体育学会第22回大会号，p.24.
- 藤田登（1972）スポーツの興味性，日本体育学会第23回大会号，p.2.
- 鈴木アヤ子（1972）ゲームの場における「平等性」の一考察，日本体育学会第23回大会号，p.3.
- 中林信二（1972）日本の思想的伝統における身心の問題その1——西田の好意的直観論を中心に——，日本体育学会第23回大会号，p.6.
- 落合久子（1972）ペスタロッチにおける貧民救済と体育，日本体育学会第23回大会号，p.15.
- 寺嶋善一（1972）アメリカにおけるY.M.C.A.の体育事業第一報——ピューリタニズム・プロテスタンティズムと体育・スポーツ活動の融合を中心に——，日本体育学会第23回大会号，p.16.
- 浜口陽吉（1973）生命延長の体育に関する研究，日本体育学会第24回大会号，p.8.
- 山口順子（1973）米国における「運動教育」の展開について——E. Methenyにおける理論的前提——，日本体育学会第24回大会号，p.6.
- 山口順子（1976）Human Movement Studiesにおける体育学の統合化の方向について，日本体育学会第27回大会号，p.43.
- 山口順子（1984）身体意識の階層性——世阿弥の演技論を手掛かりとして——，日本体育学会第35回大会号，p.68.

- 山口順子（1998）意味の源泉としての運動経験——教育における新しい知の次元——，日本体育学会第49回大会号，p.72.
- 佐野裕（1973）野外活動における自然意識，日本体育学会第24回大会号，p.9.
- 深沢宏（1973）「遊戯の存在論」についての研究——E. フィンクの遊戯論，日本体育学会第24回大会号，p.10.
- 舛本直文他（1974）国民の運動技術獲得への希望，日本体育学会第25回大会号，p.99.
- 舛本直文他（1975）スポーツにおける「たのしさ体験」の規範形成化に対する美学的考察，日本体育学会第26回大会号，p.53.
- 舛本直文他（1976）スポーツの美学的考察——スポーツ実践者の美的体験（Aesthetic experience），日本体育学会第27回大会号，p.58.
- 舛本直文（1986）運動象徴——P. J. Arnoldのmovisymbolをめぐる——，日本体育学会第37回大会号，p.49.
- 滝沢文雄他（1974）国民の身体観，日本体育学会第25回大会号，p.101.
- 滝沢文雄他（1975）国民の身体観に関する一考察，日本体育学会第26回大会号，p.58.
- 滝沢文雄他（1976）「身体」「肉体」の概念規定，日本体育学会第27回大会号，p.52.
- 滝沢文雄（1977）身体的対話について，日本体育学会第28回大会号，p.58.
- 滝沢文雄（1984）これからの社会における体育の根本原理——その体系的提案——，日本体育学会第35回大会号，p.11.
- 滝沢文雄（1991）文化としての身体性，日本体育学会第42回大会号，p.49.
- 滝沢文雄（1996）賢い「からだ」——実践知と身体の論理——，日本体育学会第47回大会号，p.131.
- 滝沢文雄（1999）「身体知」の教育的意味，日本体育学会第50回大会号，p.154.
- 遠藤卓郎（1974）メルロ＝ポンティの身体図式について，日本体育学会第25回大会号，p.116.
- 遠藤卓郎他（1975）メルロ＝ポンティの身体図式について（II），日本体育学会第26回大会号，p.62.
- 遠藤卓郎他（1976）篠原・前川両氏の「身体論」の検討，日本体育学会第27回大会号，p.54.
- 遠藤卓郎他（1978）「スポーツにおける身体論」について(1)——研究対象の視点から・その課題と役割——，日本体育学会第29回大会号，p.50.
- 遠藤卓郎（1993）生涯体育の原理——宗教的なものを考える立場から——，日本体育学会第44回大会号，p.64.
- 関良幸他（1975）体育における主体性の一考察，日本体育学会第26回大会号，p.52.
- 難波邦雄他（1975）スポーツにおける創造性に関する一考察——とくにサッカーの構造分析に基づいて——，日本体育学会第26回大会号，p.56.

- 入口豊他 (1975) スポーツ経験の自然主義的検討, 日本体育学会第26回大会号, p.57.
- 五十嵐優二 (1976) 天台の十界論における体育・スポーツの一考察, 日本体育学会第27回大会号, p.46.
- 岡本研二 (1976) ルソーにおける身体の意味について——「エミール」にみられる鍛錬観, 日本体育学会第27回大会号, p.47.
- 山市孟 (1977) 「スポーツ行動」に関する認識方法試論, 日本体育学会第28回大会号, p.54.
- 佐藤臣彦 (1977) アリストテレスにおける身体論の位相について——ソーマと身体の徳——, 日本体育学会第28回大会号, p.56.
- 佐藤臣彦他 (1991) 制度と身体性, 日本体育学会第42回大会号, p.48.
- 佐藤臣彦他 (1996) 身体のテオリア(2) 身体における自然性と文化性, 日本体育学会第47回大会号, p.62.
- 本田俊教 (1977) 客体としての身体について, 日本体育学会第28回大会号, p.57.
- 本田俊教 (1978) ニーチェの身体(Leib)について, 日本体育学会第29回大会号, p.51.
- 本田俊教他 (1981) スポーツと創造性について, 日本体育学会第32回大会号, p.138.
- 藤井陽江 (1978) 私見「体育の間直し」, 日本体育学会第29回大会号, p.52.
- 藤井陽江 (1979) 体育はいかにあるべきか・その1, 日本体育学会第30回大会号, p.65.
- 藤井陽江 (1980) 体育はいかにあるべきか・その2, 日本体育学会第31回大会号, p.135.
- 藤井陽江 (1982) 体育はいかにあるべきか・その3, 日本体育学会第33回大会号, p.73.
- 一正孝他 (1979) A.アウグスチヌスの身体観, 日本体育学会第30回大会号, p.64.
- 一正孝他 (1980) 「旧約聖書」における「身体」, 日本体育学会第31回大会号, p.127.
- 一正孝 (1981) 聖書における「身体観」の一考察——パウロにおける身体とは——, 日本体育学会第32回大会号, p.132.
- 一正孝 (1983) 聖書における「からだ」の倫理的考察——パウロ——, 日本体育学会第34回大会号, p.77.
- 若林正光他 (1981) 心身相関に関する一考察——「生の動体」としての運動学的哲学と力動的哲学の重層性について——, 日本体育学会第32回大会号, p.131.
- 若林正光他 (1982) 身体論に関する一考察——身体の表現から見た身体の力動的性格を中心にして——, 日本体育学会第33回大会号, p.59.
- 岡田猛 (1981) 自然的存在としての「身体」について, 日本体育学会第32回大会号, p.130.
- 岡田猛 (1985) 身体についての一考察——L. フォイエルバッハの「肉体と靈魂・肉と精神の二元論」論文に關説して, 日本体育学会第36回大会号, p.59.
- 森真知子 (1982) J. N. Schmitzの体育教授学について, 日本体育学会第33回大会号, p.70.

- 木村真知子 (1989) 青年期の体育の課題について, 日本体育学会第40回大会号, p.32.
- 木村真知子 (1999) 問われる「からだ観」と体育の意味, 日本体育学会第50回大会号, p.138.
- 片岡暁夫 (1979) 体育の定義に関する一考察, 日本体育学会第30回大会号, p.57.
- 片岡暁夫 (1988) スポーツ活動の知的側面に関する検討, 日本体育学会第39回大会号, p.43.
- 服部百合子他 (1980) 体育の学習課程における人間関係の構造研究・とくに「相互身体・運動図式」の概念とその性間構造について, 日本体育学会第31回大会号, p.124.
- 畠山トミ他 (1980) 思想史における身体の疎外と復権, 日本体育学会第31回大会号, p.126.
- 谷敏光他 (1980) 身体論についての一考察——篠田・羽田・佐藤の身体論を中心に——, 日本体育学会第31回大会号, p.136.
- 谷敏光 (1981) 篠原助市の体育論について, 日本体育学会第32回大会号, p.134.
- 木村はるみ他 (1980) 舞踊研究における Nietzsche の哲学, 日本体育学会第31回大会号, p.139.
- 高部岩雄 (1981) 体育・体育学に関する基本的諸概念の確認と創造について——未来学的発想における体育——, 日本体育学会第32回大会号, p.57.
- 牧野共明 (1982) スポーツ教育論におけるスポーツの価値のとらえ方について, 日本体育学会第33回大会号, p.64.
- 内山治樹他 (1982) Hans Groll の「身体文化」(Leibeskultur) の概念に関する一考察, 日本体育学会第33回大会号, p.69.
- 豊嶋建広他 (1983) 思想史における身体の復権——身体現象学——, 日本体育学会第34回大会号, p.71.
- 豊嶋建広他 (1984) 主体としてのからだ, 日本体育学会第35回大会号, p.69.
- 豊嶋建広他 (1985) 主体としてのからだ (II), 日本体育学会第36回大会号, p.60.
- 小林日出至郎 (1983) プラトンの体育思想における価値の検討, 日本体育学会第34回大会号, p.73.
- 小林日出至郎 (1985) プラトンの思想におけるギムナスティケーの目的に関する考察——「魂」の三契機について, 日本体育学会第36回大会号, p.64.
- 斎藤篤司他 (1983) スポーツにおける個人と社会の位置づけについての一考察, 日本体育学会第34回大会号, p.86.
- 平井章 (1984) これからの社会における体育の根本原理, 日本体育学会第35回大会号, p.12.
- 川口智久 (1985) 現代社会に果たしうる体育とスポーツの役割, 日本体育学会第36回大会号, p.8.

- 岡出美則（1985）オモ・グルーペにみる研究の関心並びにその推移——仮説としての三つの時期——，日本体育学会第36回大会号，p.61.
- 北村勝朗（1989）陶行知の「做」概念——力と心の統一的把握の問題——，日本体育学会第40回大会号，p.81.
- 来栖寛（1989）スポーツの概念，日本体育学会第40回大会号，p.90.
- 来栖寛（1992）スポーツの本質(carry awayの世界)，日本体育学会第43回大会号，p.103.
- 関春南（1989）文化としてのスポーツ把握の方法について，日本体育学会第40回大会号，p.93.
- 関春南（1990）スポーツの現代的価値について，日本体育学会第41回大会号，p.65.
- 加藤泰樹（1991）教育制度における身体性の多様化に向けて，日本体育学会第42回大会号，p.51.
- 加藤泰樹（1995）体育授業の存在論的構造に関する一考察，日本体育学会第46回大会号，p.148.
- 石川旦（1993）生涯体育の原理——生命科学的立場から——，日本体育学会第44回大会号，p.62.
- 工藤英三（1994）体育は「人間」をどうとりあつかってきたか——日本の体育に求められるもの——，日本体育学会第45回大会号，p.75.
- 原田憲一（1997）運動の知性的意味を探る(1) 運動と知性——運動すると何が生ずるか——，日本体育学会第48回大会号，p.60.
- 矢野智司（1998）非知の体験としての運動——「運動と知」についての生成的教育人間学からの試論——，日本体育学会第49回大会号，p.71.
- 平田友子（1999）神秘主義思想家グルジェフのthe movements——「人間の調和的発達のための舞踊」に関する考察，日本体育学会第50回大会号，p.243.